

## 1-4 非正規雇用者の割合

### (1) 指標選定の考え方

- 就業分野の変化を把握する。
- 「社会保障の機能強化のための緊急対策 ～5つの安心プラン～」において、「非正規労働者について、正規雇用との近郊処遇の確保、能力開発支援策の充実、日雇派遣など労働者派遣法制の見直し等の方策を講じ、非正規労働者が将来に希望を持ち、安心して働き、生活できる環境の整備を図る」ことが掲げられている。

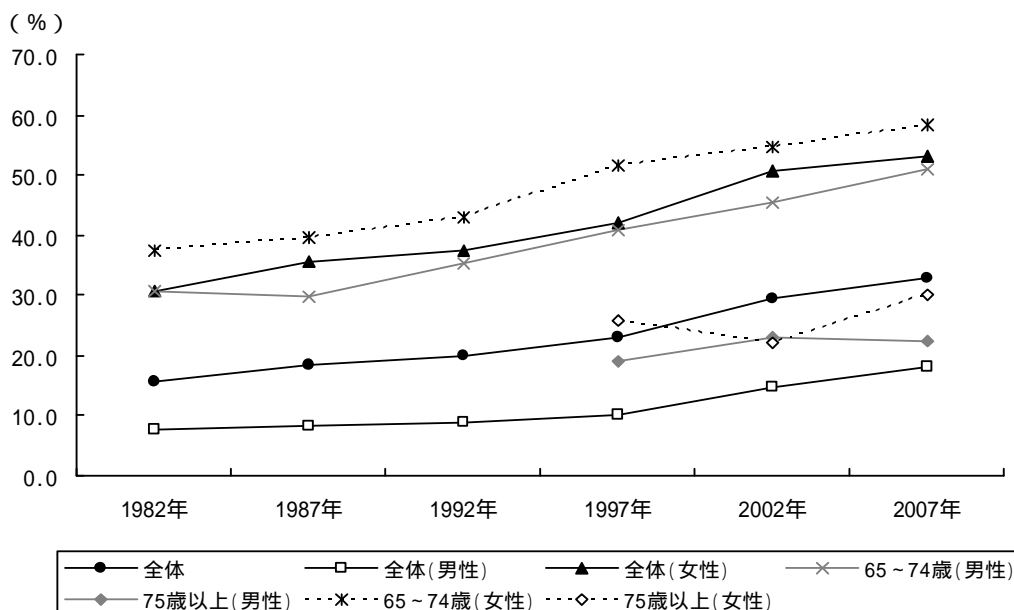
### (2) 分析対象データについて

- 「就業構造基本調査」(総務省)より1982年、1987年、1992年、1997年、2002年、2007年の6時点の年齢(5歳階級)別非正規雇用者数を、「年齢(5歳階級)別雇用者数」で除した割合を使用した。
- なお、本データに関しては、以下の点に留意が必要である。
  - ✓ 分母となる数値に雇用者数を用いていること
  - ✓ 分子となる非正規雇用者数は、パート、アルバイト、派遣社員、契約社員、嘱託、その他の合計値を用いていること
  - ✓ 1979以前は雇用形態別のデータは掲載されていないこと

### (3) 分析対象データの傾向について

- 非正規雇用者の割合については1982年以降男女ともに増加傾向にある。
- 男性に比べて女性の非正規雇用者の割合が高くなっている。
- 1982年から1997年までは全体(男性)の非正規雇用者の割合は横ばいであったが、65～74歳(男性)は増加を続けている。さらに、1997年以降非正規雇用者の割合はさらに大きくなっている。

図表 非正規雇用者の割合



出典) 総務省「就業構造基本調査」(各年)

#### (4)分析結果

- **時代効果**:女性については1982年から一貫して非正規雇用者の割合は増加している。また、男性については1982年から1997年まではほぼ横ばいで推移していたが、1997年以降は非正規雇用者の割合が急増している。

##### [考察]

- ✓ 二次産業から三次産業に従業者がシフトしていること(指標1-6)に伴い、特に女性を中心に就労形態についてもパート・アルバイトや派遣労働者など多様化が進んでいる。
- ✓ 加えて、2008年の金融危機以前までは二次産業の非正規労働力の活用が進んできたことも影響していると考えられる。

- **年齢効果**:男性は20代前半から半ばにかけて高くなっており、その後非正規雇用者の割合は減少し、20代後半～50代にかけてほぼ横ばいで推移する。その後、60歳を境に非正規雇用者の割合は増加している。一方、女性は20代前半から40前半まで増加傾向にあり、40代半ば～50代後半まで減少を続け、60代で再び増加した後、減少するM字カーブを描いている。

##### [考察]

- ✓ 男性は、20代後半～50代までは正社員として就業している人が多く、20代半ばまでの就職する以前の学生期や定年後の就労において非正規雇用者として働く傾向があると考えられる。
- ✓ 女性はM字カーブを描いているが、M字の頂点となる年齢が一般に言われるM字カーブとはずれが生じており、むしろ30代半ば～40半ばの子育てがひと段落した年齢層と、夫が定年を迎える時期の2時点が山となっている。子どもの幼少期と、夫の定年後の家計の助けとして、パート、派遣等の就労形態が活用されていると考えられる。

- **世代効果**:1940～1960年代生まれ(男性)については非正規労働者の割合が少なくなっているが、1960年代以降、増加している。女性については1930～50年代生まれまでは非正規労働者の割合が多くなっているが、1970年代に向けて減少し、1970年以降増加している。

##### [考察]

- ✓ 1940年代生まれの世代は、高度経済成長を背景に、男性の長期雇用が前提とされた雇用システムが確立した時期に働き盛りの年齢を過ごした世代であると考えられる。
- ✓ 一方で1970年代生まれの世代は、バブル崩壊後の不況期に就職を迎えた世代である。1990年代後半は男女ともに非正規雇用が増加した時代(時代効果参照)であり、不況を背景に正規雇用での就職ができなかった人が非正規雇用で働き始めたと考えられる。

- **交互作用**:男性では、1987年時点では50代後半に見られた山が、2007年時点では60代半ばに移動している。女性では1982年当時は、20代の非正規雇用の割合は低かったが、徐々に高まってきている。また、1982年当時30代前半に見られた山は2007年時点では40代半ば～50代半ばに移動している。

##### [考察]

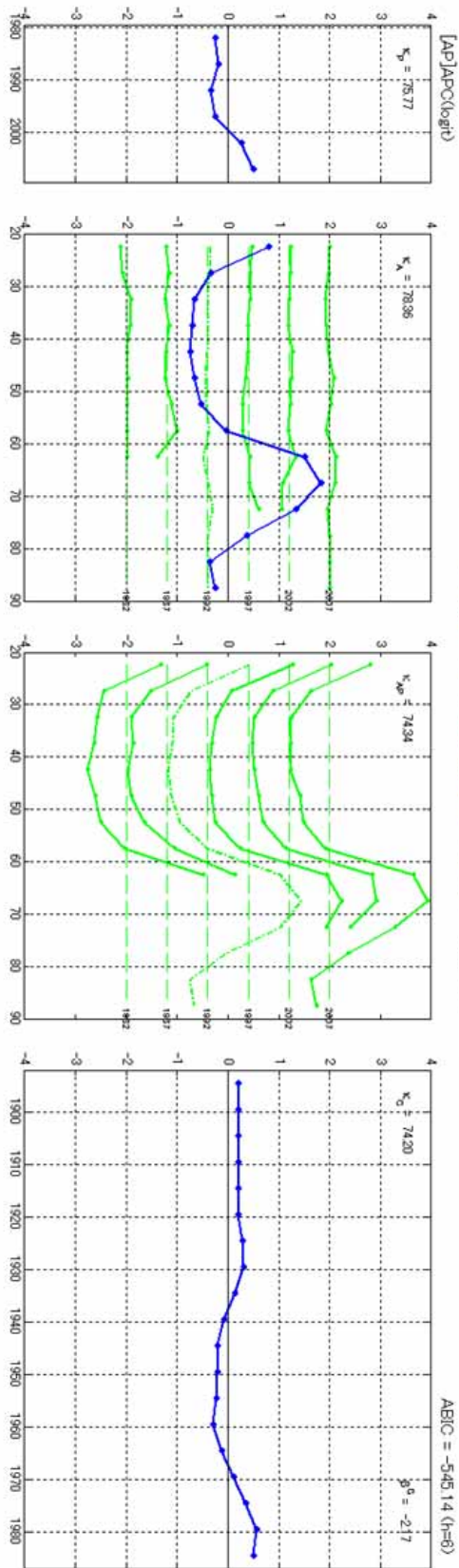
- ✓ 男性は、定年年齢の上昇とともに定年後の非正規による就労年齢も高まったと考えられる。
- ✓ 女性については、大卒後正規職員として就業せず派遣等の形態で働く人が増えていること、晩婚化、晩産化により復職するタイミングが遅くなっていることが考えられる。

#### (5)今後の展望

- 非正規雇用者の割合は男女ともに増加していくと考えられる。
- ただし、本指標は経済状況と強く関連していると考えられるため、経済状況の変化により大きく変動するものと考えられる。

(6) コーホート分析結果表

1-4 非正規雇用者の割合 (男性)



1-4 非正規雇用者の割合 (女性)

